

平成 15 年度後期
A 群科目基礎ゼミナール
「学生による授業評価」
報 告 書

京都大学大学院人間・環境学研究科全学共通教育実施委員会・文系群会
京都大学高等教育研究開発推進機構

目 次

はじめに.....	1
第1章 調査の概要.....	2
1 調査方法・質問内容・回答数.....	2
2 集計と情報の管理.....	3
3 本報告書の構成.....	3
第2章 A群科目基礎ゼミナール全体についての学生の意見.....	4
1 総合的評価.....	4
2 項目別集計.....	5
2.1 肯定的評価.....	6
(a) 主体的に参加・発表・議論できる（20件）.....	6
(b) 教師と緊密にコミュニケーションできる（10件）.....	7
(c) 知的訓練になる（10件）.....	8
(d) ゼミナール形式のメリット（その他・全般）（24件）.....	8
(e) 専門以外のことが学べる・他学部生と交流できる（7件）.....	9
(f) その他・全般的な肯定的評価（7件）.....	10
2.2 問題点の指摘.....	10
(a) 議論の場があまりない・ゼミ形式のメリットが生かされていない（12件）.....	10
(b) その他の問題点の指摘（34件）.....	11
2.3 その他のコメント.....	13
(a) 授業の形式・内容が多様（7件）.....	13
(b) 基礎ゼミ科目存続・増設の要望（8件）.....	14
(c) その他の要望・コメント（19件）.....	14
3 まとめ.....	16
第3章 個々の授業に関する学生たちの意見.....	17
1 総合的評価.....	17
2 項目別集計.....	18
2.1 肯定的評価.....	19
(a) 主体的に参加・発表・議論できる（23件）.....	19
(b) 他の学生から知的刺激を受ける（15件）.....	21
(c) 教師と緊密にコミュニケーションできる（12件）.....	22
(d) 知的訓練になる（41件）.....	23
(e) ゼミナール形式のメリット（その他・全般）（35件）.....	25
(f) 内容が興味深い（51件）.....	26
(g) 専門以外のことが学べる・他学部生と交流できる（9件）.....	27
(h) その他・全般的な肯定的評価（24件）.....	27
2.2 問題点の指摘.....	28
(a) 議論の場があまりない（17件）.....	28
(b) 負担が大きすぎる（10件）.....	30
(c) 内容が高度・専門的すぎる（7件）.....	30
(d) 説明が不十分・冗長・わかりにくい（11件）.....	31
(e) レジюме・資料の配布が少ない（ない）（8件）.....	31
(f) その他の問題点の指摘（40件）.....	31
2.3 その他の要望・コメント（30件）.....	32
3 まとめ.....	34
おわりに.....	35

巻末資料1：A群科目基礎ゼミナールに関する「学生による授業評価」協力のお願い

巻末資料2：平成15年度後期A群科目基礎ゼミナール「学生による授業評価」調査票

はじめに

人間・環境学研究科全学共通教育実施委員会・文系群会(以下、「文系群会」と略)は、2003(平成15)年12月から翌年1月にかけて、後期開講のA群基礎ゼミナール系科目(実習、講読なども含む)についての「学生による授業評価」を実施した。この調査は、2003(平成15)年度前期にA群基礎論系講義科目を対象として行われた「学生による授業評価」(以下、「前回調査」と略¹)に続くものであり、A群科目総体に対する学生の態度・意見を把握することを目的として、教養教育専門委員会および同A群科目部会の後援のもとにおこなわれたものである²。

今回の調査においても前回同様、主たる目的はA群科目総体に対する学生の率直な態度・意見を把握することであり、学生に個々の授業を採点・評価させるという(他大学での「学生による授業評価」でしばしばみられる)スタイルはとらなかった。その理由については前回調査の報告書に詳しいが、要は、アンケート項目のような既成の枠組にとらわれない学生の「生の声」を聞くことを通じて、A群科目の教育全体の現状と課題を明らかにしたいという一点に尽きる。こうしたわれわれの意図・目的をご理解いただいた上で、本報告書をお読みいただければ幸いである。

¹ 前回調査の報告書『A群科目に関する「学生による授業評価」・報告書』(2004年2月)は、高等教育研究開発推進機構ホームページにおいて公開されている(<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0188.pdf>)。

² これらの調査の実施にいたるまでの経緯・背景については、詳しくは上記前回調査の報告書を参照されたいが、要点は次のとおりである。

2002(平成14)年11月に開催された「京都大学教養教育ワークショップ」において、総合人間学部および人間・環境学研究科のA群科目担当者と各部局代表者とのあいだでA群科目の理念や現状をめぐる活発な議論がおこなわれ、その結果、文系群会は自分たちに二つの課題が課せられていることを認識するに至った。一つは京都大学の教養教育に対する受講者(学生サイド)の態度・意見の把握であり、もう一つは、教養教育に関する文系群会全体(教員サイド)としての考えの提示である。

前者の課題へのアプローチとしてなされたのが、いうまでもなく前回および今回の調査「学生による授業評価」の試みであり、これは今後も継続して実施される予定である。

後者については、2004(平成16)年6月、文系群会の総意を示す文書として『教養教育に関する人間・環境学研究科・文系群会の考え』(<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/pdf/link/link0185.pdf>)が成立した。この文書は、A群科目における講義科目と基礎ゼミナール系科目という二つの形式の本質、および両者の関係について考える上で示唆的な内容を含んでいるので、本報告書においても、結論部分で参照することとしたい。

第1章 調査の概要

1 調査方法・質問内容・回答数

調査は2003（平成15）年度後期授業期間の最後の2週（2003年12月から2004年1月）に実施した。調査方法および質問内容は前回調査と同様である。すなわち、実施に際しては、調査対象となった下記16科目（表1-1）の担当教員が授業時に調査票および依頼文を配布し、学生各自に持ち帰って記入してもらい、記入済み調査票を共通教育教務掛前に設置したポストに投函してもらうという方式をとった（なお授業に出られなかった学生のため、調査票・依頼文の配布は共通教育教務掛の窓口でも行った）。配布・回収をこのような方式にすると回収率は低くなるのが予想されるが、その分内容の濃い回答が寄せられるのではないかと考え、この方式を採用した。

表1-1 調査を実施した科目・担当教員

系列	科目名	担当教員	対象回生
哲学・思想系	人間存在論基礎ゼミナール B	安井 邦夫	1 - 4
	東洋社会思想史文献講読 B	西脇 常記	1 - 4
歴史・文明系	日本古代・中世政治文化論基礎ゼミナール B	元木 泰雄	1 - 4
	東洋史文献講読 B	松浦 茂	1 - 4
行動科学系	人間形成論基礎ゼミナール B	小山 静子	1 - 4
	社会学基礎ゼミナール B	高橋 由典	1 - 4
	社会学基礎ゼミナール B	吉田 純	1 - 4
地域・文化系	地理学基礎ゼミナール	小方 登	1 - 4
	地理学基礎ゼミナール	山田 誠	1 - 4
	生活環境構成論基礎ゼミナール	西垣 安比古	1 - 4
社会科学系	国際関係法基礎ゼミナール B	西井 正弘	2 - 4
	現代経済論基礎ゼミナール B	大黒 弘慈	1 - 4
	社会・経済システム原論基礎ゼミナール B	間宮 陽介	1 - 4
	社会統計学実習 B	長屋 政勝	1 - 4
複合系 (A・B群)	人間存在論基礎ゼミナール B	富田 恭彦	1 - 4
	感覚知覚情報論基礎ゼミナール	江島 義道	1 - 4

有効回答数は176であった。回答は上記16科目すべてにほぼ満遍なくあった。調査票には、受講している科目名・教員名を最初に記入してもらったうえで、下記の二つの質問をした（細かな質問項目を設定しなかった理由については、「はじめに」で述べたとおりである）³。

³ 回答者はいうまでもなく匿名であるが、今回は（前回と異なり）学部・回生についても記入しない完全匿名方式をとった。これは、基礎ゼミナール系科目では学生数が少ないため、学部・回生を記入することにより実質的に匿名性が損なわれる可能性があることを考慮した結果である。

現在受講している上の授業について、日頃考えていること、感じていることを自由に書いてください。

A群科目基礎ゼミナール（実習、講読なども含む）の授業全体について、考えていること、感じていることを自由に書いてください。

2 集計と情報の管理

今回の調査も自由回答方式を採用したので、集計にあたってはその方式の特性をできるだけ生かすようにした。すなわち、各学生の回答文をよく読み込んだ上で、比較的多くの回答に共通してみられる内容（たとえば、「主体的に参加・発表できる」「専門以外のことが学べる」「議論の場があまりない」など）を抽出し、それらの項目ごとに集計をおこなった。したがって多くの場合、一つの回答に複数の項目が該当することになった。質的なデータのとりまとめという事柄の性質上、客観性を確保するため、WG内で項目の抽出方法や分類・集計方法について討議するなど、特段の配慮をした。また回答には個々の授業・教員に関連する情報が多く含まれていたため、情報の管理には十分な注意を払った。

3 本報告書の構成

本報告書では、本調査の趣旨に沿って、調査票の順序とは逆に第2章でA群科目基礎ゼミナール全体についての回答内容（問 ）を紹介し、第3章で個々の授業についての回答内容（問 ）を紹介していくことにしたい。紹介した回答内容は、それぞれの項目に属するものすべてではないが、学生の多様な意見をご覧いただけるよう、なるべく多くの回答を掲載するように努めた。

第2章 A群科目基礎ゼミナール全体についての学生の意見

この章では、「A群科目基礎ゼミナール(実習、講読なども含む)の授業全体について、考えていること、感じていることを自由に書いてください」(問)という問いに対する回答を紹介・検討していく。なお、この問は、調査対象となった16科目のみならず「A群科目基礎ゼミナール(実習、講読なども含む)の全体」についての意見を求めたものである。

1 総合的評価

最初に回答内容を、「A群科目基礎ゼミナール全体についての総合的評価」という観点で大きく分類した結果を円グラフ(図2-1)で示した。見られるとおり、全体の3割強がA群科目基礎ゼミナール全体について「よい」という肯定的評価または積極的要望(基礎ゼミナール科目増設の希望など)をしているが、その一方で両価的または中間的な回答は1割強、「問題あり」とする回答も2割あった⁴。

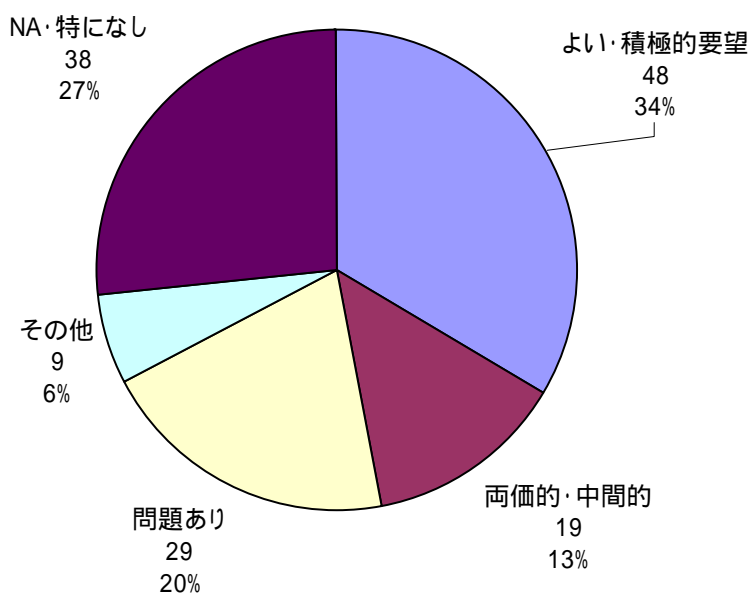


図2-1 問 の回答分布(総合的評価)

⁴ 問 には「他の基礎ゼミナール科目ですすでにこの欄の回答をした人は、『すでに回答済み』とだけ記入してください」と注記し、これに該当した回答は集計に含めなかった。

2 項目別集計

次に、回答内容を項目別に整理したものをグラフ（図2 - 2）で示そう。数字は、回答の頻度を表す（第1章で述べたとおり、一人の回答を複数の項目にカウントしていることがある）。すなわち「主体的に参加・発表・議論できる」が20となっているのは、回答者のうち20人が「主体的に参加・発表・議論できる」という趣旨の回答をしているという意味である。なお、件数が5件に満たない項目は「その他」などにまとめた。

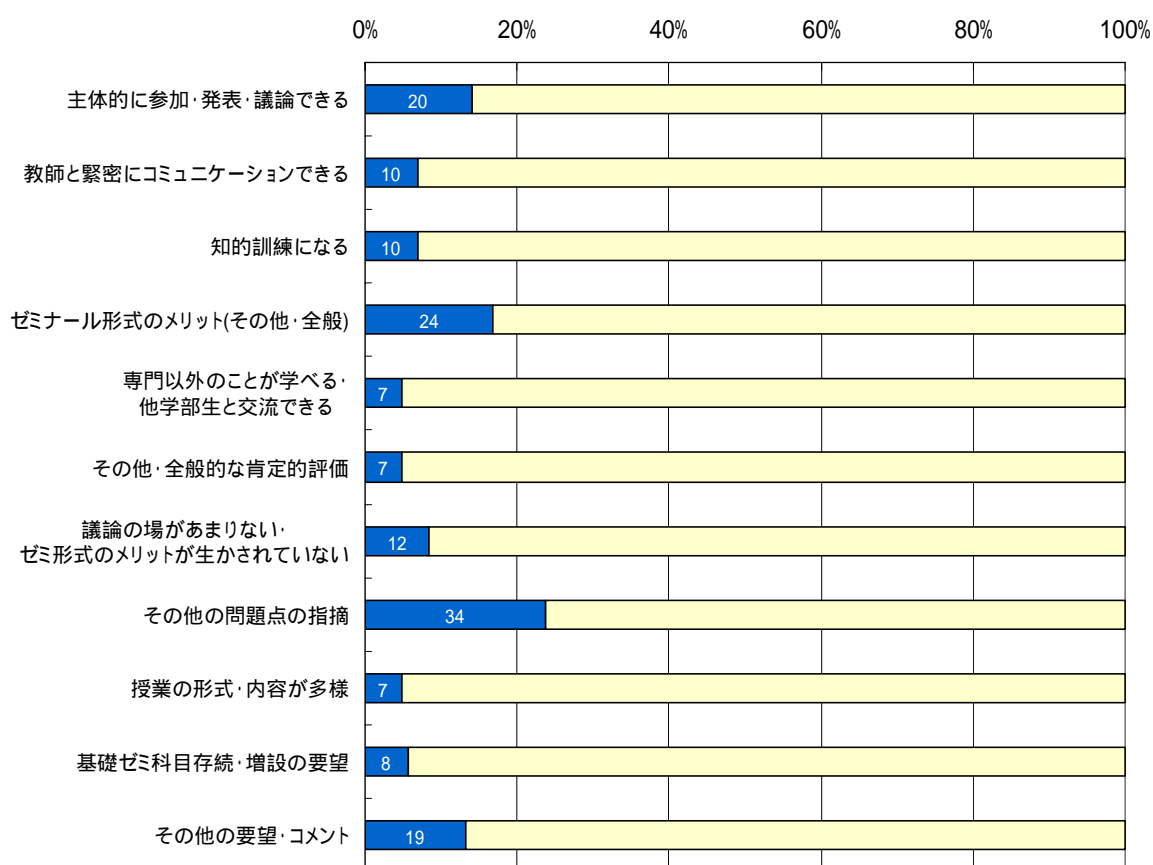


図2 - 2 問 の回答（項目別）

以下、それぞれの項目ごとの回答例を、肯定的評価（2.1）、問題点の指摘（2.2）およびその他のコメント（2.3）に大別し、原則として学生の記述そのままに紹介するとともに、それぞれについて若干のコメントを加えるという形式で進めていきたい。

2.1 肯定的評価

(a) 主体的に参加・発表・議論できる (20件)

「一人一人が授業に参加している実感がわく」「講義よりも自分の意見を述べたり、他人の意見を聞いたりする機会があってよい」など、ときに講義形式と比較しながら、学生が主体的に参加・発表・議論できるというゼミナール形式の本質的メリットを指摘した記述が下記の例のように多くみられた(各回答の最後の数字は整理番号、以下同様)。

少人数でやると、より一人一人が授業に参加している実感がわくので、やる気のある人にはいいと思う。(046)

講義よりも自分の意見を述べたり、他人の意見を聞いたりする機会があってよい。(054)

ただでさえ、教えられたことを享受するのみで、思考しようとしなない受動的学生が多いので、このように思考を喚起する方式のゼミナールは意義のあるものだと感じる。(057)

1 回生のうちから少人数の授業に参加することで、相手の議論の聞き方や反論方法などを学べたように思います。(073)

ゼミ形式の授業はとても大事。こういうときぐらいしか、学問の内容に関して、自分の思ったことを言える機会がない。(075)

結局、講義というものは本を読むのと同じいが、ゼミというのは対話を通して、一人で本を読んで得られるものとは違ったものが得られるのだ。(077)

積極的に議論に参加したい人にいいでしょうし、いろいろな知識が入る場だと思っています。本を読んだり、聞くだけでは入ってこない知識が入りますし、疑問をぶつけることのできる場だと考えています。(078)

大人数の講義はサボりがちになるし、ましてや自分の意見をちゃんと言う機会などないので、少人数ゼミはやはり必要だと強く思います。(110)

思想等を扱う授業は、どんどん発言できる形態にすべきだ。異なる意見をぶつける事によって理解が深まるのだから。……受け身的な講義だけではだめで、意志表示する場は必要だと思う。(111)

実際に授業に参加している、と感じられて充実感がある。(134)

講義形式のものばかりだと自分で何かやるということがないので、実習、講義、ゼミは必要だと思う。(149)

基礎ゼミナールは講義とは異なり、自分の意見を持ち、それを人に理解してもらえるまでにまとめる練習のできる数少ない機会だと思います。大勢の前で発表する機会の少なくなっている中で、こういった授業は非常に有用だと感じました。(153)

少人数でディスカッションするのは楽しい。通常の講義では、自分の意見を表明出来ないで、ゼミナール形式の授業は受けていて充実感がある。(154)

(b) 教師と緊密にコミュニケーションできる (10件)

「先生が生徒と対等な立場にあたってくれたから、やり易かった」「実際に教員とはなせる場があって嬉しい」など、学生と教師との緊密なコミュニケーションを歓迎する趣旨の記述も、下記の例のようになりみられた。この点も、学生の匿名性の高い講義形式と比較して、ゼミナール形式のメリットとして学生は評価しているといえよう。

基礎ゼミナールのような形式、つまり教官と学生が同じ視線の位置に立って学びを行うという形は非常に労力もかかるが、その分得られるものも多い。(001)

先生の人柄がわかって良いと思う。(006)

一般形式の授業に比べ、より教授との距離が近く、理解が深まり、良いと思います。(037)

先生が生徒と対等な立場にあたってくれたから、やり易かった。先生の「俺は余り詳しくないから」みたいな発言に共感を持てた。(050)

実際に教官とはなせる場があって嬉しいです。(089)

教官に名前を覚えてもらえるのも嬉しい。(147)

教官はもちろん、他の学生の生きた意見や思想が得られるので、基礎ゼミの意義は大きいと思う。(152)

ゼミ形式の授業は教官に親近感を覚えられるのがいいです。(158)

教官と議論することもできるし、ゼミ発表から得るものも多いと思う。(163)

(c) 知的訓練になる (10件)

「自分でやりとげた達成感があってよい」「ものごとを考える訓練になる」など、知的訓練としての基礎ゼミナールの有効性を高く評価する記述も、下記の例のようにみられた。

宿題など大変な面もあるが、自分でやりとげた達成感があってよい。(018)

このように思考を喚起する方式のゼミナールは意義のあるものだと感じる。(057)

思い切って受けてみると、これまでの生活に何のかかわりもなかったことを考えられるようになるので、基礎ゼミを受けてよかったと思う。(076)

ものごとを考える訓練になると思う。(090)

こういう常に緊張する授業はあったほうが良いと思う。(091)

実習で学習すると講義に比べて少人数なので、授業への取り組む姿勢というものが真剣なものになり、より良い効果が得られると感じた。(108)

専門性の高い授業が多く、予習、復習ともに大変だが、本当に身につくもので、一生の財産になる。講義よりずっと良い。(167)

(d) ゼミナール形式のメリット (その他・全般)(24件)

(a)~(c)の他にも、ゼミナール形式固有の多様なメリット(インフォーマルな人間関係の形成、専門のゼミの準備としての有効性、体験・実地作業ができることなど)を評価する記述が、下記の例のように見られた。

【インフォーマルな人間関係の形成】

疎縁になりがちな大学生活上の人間関係を形成する場として大きな価値があると思います。(004)

たてのつながりが生まれるので良いと思う。(090)

特にゼミコンパができることが良いと思います。ゼミにおいて初めてあう先生や他の学生・院生とうちとけ、緊張をほぐすことはゼミでの議論を充実させ、深めるための必要条件です。(125)

【専門のゼミの準備として有効】

最終的なゼミを決定する上で、非常に大きな役に立つと思う。1年生から参加できるゼミは少ないので、京都大学において基礎ゼミの役割は大きい。(010)

専門でのゼミの準備として……こういった形式の授業は良いのではないのでしょうか。(103)

専門のゼミが始まるまでに、ゼミの雰囲気や、進め方がわかるので良いと思います。(138)

【体験・実地作業ができる】

実習は体験ができるから、難しい内容の事柄でもわかりやすい。(027)

講義とは違い、授業で扱われている内容について実際に作業を行なうことができるので、講義よりも理解しやすい面もある。(121)

【雰囲気が良い】

授業途中で入退室してくる人もいないし、授業に集中できるためよい。(147)

普通の講義と違い、ただ単位を集めるためではなく、ほとんどの学生が本当にその分野に興味を持ってとっている(と思う)ので、雰囲気が良いと思う。(155)

【その他】

院生の知性はとてもよい刺激になるので、学部生の向上心も育つと思う。(129)

(e) 専門以外のことが学べる・他学部生と交流できる (7件)

以上(a)~(d)のようなゼミナール形式固有のメリットでは必ずしもないが、全学共通科目であることのメリットとして、自学部での専門以外のことが学べること、他学部生と交流できることを評価した回答が下記のようにみられた。

他の学部の人と議論する場として、こういった形式の授業は良いのではないのでしょうか。(103)

総合人間学部以外の学部で「副専攻」のようなことを考えたい人にとっては（学位にはなりません）基礎ゼミナールの存在は非常にありがたいと思います。(105)

自分の専門以外（文系教科）のゼミ形式の授業を受ける機会はどういったことを除けばまずないので、この形式の授業はなくさないでほしいと思います。(106)

基礎ゼミナールは総合人間学部の主専攻科目であることが多いが、それ以外の学部の人にも比較的多く受講しているようでよいと思う。(120)

普段あまり話さない他学部、学科の学生と会話し、議論できるので、とても刺激を受けます。(125)

他学部生でも、興味のある分野について気構えすることなく受講できる(166)

(f) その他・全般的な肯定的評価（7件）

その他にも、下記のような肯定的評価がみられた。

特定の科目に時間をかけてとりくめるという点で良かったと思う。(041)

A 群の先生はやはり口が達者なので、ぼうっとしたりして言葉を聞き逃すと非常に惜しい気がします。(95)

どれも充実していると思います。(151)

もっと勉強をするためのきっかけ作りとなる。(170)

2.2 問題点の指摘

(a) 議論の場があまりない・ゼミ形式のメリットが生かされていない（12件）

次に、問題点を指摘した回答としてまず目に付くのは、「人数が多すぎて、『講義』と変わらないのがある」「ディスカッションがない」など、ゼミナール形式の本来のメリット（学生

の主体的参加、少人数でのコミュニケーションなど)が十分に実現されていないのではない
か、という指摘である。これらは、上に見たような肯定的評価のまさに裏返しであり、基礎
ゼミナール系科目への学生の期待の高さのゆえに生じてくる不満であるといえよう。また、
「学生の側に積極性、意識が皆無」と、学生自身の側の問題を指摘した意見もあった。

ゼミナールなのに講義形式(毎回)になっていたり...という経験があります。(003)

ただの講義ではゼミの意味がないと思う。(007)

人数が多すぎて、「講義」と変わらないのがある。(021)

もっと人数が少ない方がよい。(025)

基本的にパンキョーのゼミってゼミっぽくないです。パンキョーだから仕方ないかもし
れませんが、ただの講義という感じで、もっとゼミっぽく少人数で密度濃くやれたら
いいと思います。(035)

ディスカッションがない。学生のレベルもあるかもしれないが、最初に方向性を示せば
よい。(036)

A群基礎ゼミにおいて、「議論をしろ」と言われても、その議論自体を受講者は慣れてい
ないので、テキスト読解が中心となってしまう。(079)

学生の側に積極性、意識が皆無。(081)

(b) その他の問題点の指摘 (34件)

その他の問題点の指摘は、下記のように多岐にわたる。その中で比較的目に付いたのは、
「内容が専門的すぎる」、「内容に興味を持てない」(特に理系学生にとって)、シラバスの充
実を求める意見、TAに関する問題の指摘などであった(ただしTAに関しては、先に紹介
したように「院生の知性はとてもよい刺激になるので、学部生の向上心も育つと思う」と
いう肯定的評価もあったことを付け加えておきたい)。

その他では、「まずレジュメのフォーマットや発表で留意することを解説してからゼミを
行なってほしい」、あるいは(先の(a)に分類した)「議論をしろ」と言われても、その議論
自体を受講者は慣れていない」というように、ゼミナール形式に不慣れな学生(特に一回生)

へのオリエンテーションを求める意見もあった。

【内容が高度・専門的すぎる】

一般教養という枠の中ですので、あまり専門的な内容を行なうのはどうかと思う。(032)

1回生と4回生でハンデがありすぎる。講読などであればいいが、社会学ならば社会学、教育学ならば教育学の知識を持っているものとして授業を進めるのはよくないと思う。(044)

内容が専門的になるほど手を出しにくいので、より入門的なものを多く科目として出してほしいと思う。(048)

最初から極端に専門的だったり、逆にずっと専門分野に踏み込まなかったりするものもあるので、2~3回の基礎的なレクチャーを踏まえてから本格的な授業に入ってもらった方が学生としてもその分野に入りやすいと思う。(174)

【内容に興味を持ってない】

文系科目は自分としてはなじみのないことを半ば必要単位にせまられて強制的にとっているイメージがある。しかも、ゼミとなると、さらに強烈であり、強いのである。(051)

理系にとって興味深い内容のものが少ないように感じる。(065)

今のところA群科目で興味のわくような授業にめぐりあってません。(093)

【シラバスの充実が必要】

1回目の授業に出席するまでは内容・難易度が分かりにくい。シラバスがより具体的だと履修計画をたてる上で参考になると思う。(123)

シラバスを読んだだけではゼミの求めているレベルがつかめず、なかなか受講しにくくも感じます。内容的に前提となる講義等をもっと詳しく知りたいです。(146)

受講前に内容が詳しくわかるようにしてほしい。(169)

【TAに関する問題】

いくつかの基礎ゼミでは、TAの方が事実上授業を進めているようなゼミもあり、教授のやる気の無さが伝わってくることもあった。(001)

院生がアシストをするゼミナールが多いですが、授業によっては院生のアシストが十分でなくうまく進行しないもの、本筋からずれるものがあるので考慮してほしい。(118)

【その他】

一回生が多いのですから、まずレジュメのフォーマットや発表で留意することを解説してからゼミを行なってほしいです。(062)

評価基準をもっと明確にしてほしい。一番最初の講義の時に半期の流れ(この日にこんなことをするとといった感じのもの)をプリントにして配ってほしい。(080)

「基礎」だから、もう少し専門へのオリエンテーションとしてのスタンスがほしいと思うものもある。(100)

全学共通なのだから、幅広い学部生に受講してもらうのが必要ではないのか。受講生にかたよりがあってやりにくい。(119)

課題がよく出たり、わりと厳しい締めきりだったりするのが困る。特にレポートが続いている頃。(132)

2.3 その他のコメント

(a) 授業の形式・内容が多様 (7件)

上記以外では、まず「担当の先生によって形態が大きく異なる」「授業によって差がありすぎ」というように、形式・内容・難易度・その他様々な面で、A群科目基礎ゼミナールの多様性を指摘する意見が目についた。ただ、学生はこの多様性を必ずしも否定的にのみとらえているとは限らず、「話し合いという形式ばかりではないのがおもしろい」、「評価方式や難易度などの差を無くすべきとも思いません」というふうに、多様性それ自体を肯定的にとらえる意見があるのは興味深い。

基礎ゼミナールは基本的に担当の先生によって形態が大きく異なると思います。(003)

基礎ゼミといっても授業によって全然雰囲気がちがうと思った。(006)

ゼミといっても形式は様々で、話し合いという形式ばかりではないのがおもしろい。
(018)

特にありません。授業によって差がありすぎて、一概には言えません。また、評価方式や難易度などの差を無くすべきとも思いません。(042)

最初から極端に専門的だったり、逆にずっと専門分野に踏み込まなかったりするものもある (174)

(b) 基礎ゼミ科目存続・増設の要望 (8件)

次に、基礎ゼミナール系科目の存続・増設を積極的に要望する意見も次のようにみられた。これらは、すでに紹介した基礎ゼミナール系科目への高い評価と呼応しているといえよう。

もっとあってほしいと思う。(026)

基礎ゼミナールという授業形態は絶対に必要なものだと思っています。……ポケットゼミとともに是非存続させて下さい。貴重な場です。(073)

やはりゼミの方が学習の点では進展すると思うので、もっと数を増やして下さい。(104)

この形式の授業はなくさないでほしいと思います。(106)

抽選にはずれた科目があったので、基礎ゼミナールの科目を増やしてほしい。(135)

今後も種類を増やしてより大きな学習の場にして欲しい。(143)

もっと色々な授業をつくって欲しいです。(166)

(c) その他の要望・コメント (19件)

その他、多種多様なコメントがみられたが、その中でもとくに興味を引かれるのは、授業における学生の主体的学習意欲の重要性を強調したいくつかのコメントである。「ゼミをとるような輩は、やる気 or 活力にみちた性質があると思っている」という意見は、とりわけそのような主体的学習意欲に応える場として基礎ゼミナールを位置づけたものといえるし、「出席不問」を求め「学生にとって価値ある授業であれば、その授業は自然と学生で溢れる」

と述べる意見は、出席をとることによって学生に強制的・受動的に学習させるような方法への積極的異議を唱えているといえよう。また、「総合人間学部・人間環境学研究科が生徒の自主性を求めるやり方をやめてしまうなら、それは学部・研究科自体が存在意義を失ってしまうも同義である」というコメントは、全学共通教育の実施責任部局の一つとしての人間・環境学研究科に向けられた意見であると同時に、京都大学の教育全体に対して向けられた意見としても読むべきであろう。

なお、一件だけであるが「ゼミによっては、通年でも良いと思う」と、一律 Semester 制の見直しを求める意見があった。基礎ゼミナール科目は、前期を(たとえば)「学基礎ゼミナールA」、後期を「学基礎ゼミナールB」とし、実質通年科目として開講している例が多いのであるが、その趣旨が(Semester 制という制度の壁もあって)必ずしも学生には十分に浸透していないのかもしれない。

語学の授業についても言えることですが、出席不問にしてもらいたいです。大学なのだから、出席するか、否かは学生の自由としてほしいです。学生にとって価値ある授業であれば、その授業は自然と学生で溢れることになると思います。(009)

一般的に言って、ゼミをとるような輩は、やる気 or 活力にみちた性質があると思っています。(051)

総合人間学部・人間環境学研究科が生徒の自主性を求めるやり方をやめてしまうなら、それは学部・研究科自体が存在意義を失ってしまうも同義である。総合人間学部生のみを対象科目にしてでも、これからずっと続けていくべきである。(057)

基礎ゼミを一律 Semester 制にするのではなく、そのゼミに合った授業形態をとるべきだと思う。ゼミによっては、通年でも良いと思う。(059)

参加するのに勇気がいり、単位のことだけ考えると4回など余裕のできた時に回そうと考えてしまう。(102)

学習意欲を増すような雰囲気づくりに期待。(124)

3 まとめ

以上で、A群科目基礎ゼミナールの全体に関する回答内容の紹介を終えたい。得られた知見は、次のようにまとめることができよう。

全体として、学生たちのA群科目基礎ゼミナールに対する評価ないし期待は高い。それは主として、学生の主体的参加、教師との緊密なコミュニケーション、あるいは知的訓練としての有効性など、ゼミナール形式固有のメリットに対して向けられたものである。また、そうした高い評価ないし期待から、基礎ゼミナール系科目の一層の拡充を求める意見も出てきていると考えられる。

これらの結果は、A群科目基礎ゼミナール担当者を勇気づけるのみならず、京都大学の全学共通教育にとって、学生の主体的参加を促すゼミナールという授業形式が果たす役割の重要性を裏づけているといえよう。

その一方で、いわばそうした期待の裏返しとして、ゼミナール形式固有のメリットが十分に実現されていないのではないかという批判的意見も、かなりの学生によって表明されている。場合によっては学生の誤解が含まれている可能性も否定はできないが、今後の一層の授業改善のためには、こうした意見にわれわれは謙虚に耳を傾けるべきであろう。また、(2.2で触れたように)「議論すること」そのものに慣れていない学生(特に一回生)の存在を考慮すれば、個々のゼミナールの中で、ゼミナールという授業形式そのものへのある程度のオリエンテーションや導入教育をおこなうことが検討されてもよいかもしれない。

ゼミナールという授業形式は、当然のことではあるが、学生の主体的・積極的参加があっではじめて成立するものである。それゆえに、基礎ゼミナールへの高い評価や期待(上記)が存在する一方で、その期待を裏切られることへの不満や批判(上記)も出てくるわけであるが、学生自身もその点をよく意識しており、それが場合によっては、「学生の側に積極性が皆無」というふうに、多くの受動的学生に対する批判としてあらわれているとも考えられる。また、積極的参加の意欲なしに基礎ゼミナール系科目を履修した学生は、「厳しすぎる」「難しすぎる」というふうに、学生への要求水準の高さに音を上げている可能性も否定できない。

第3章 個々の授業に関する学生たちの意見

この章では、「現在受講している上の授業〔回答者が調査票配布時に出席していた授業〕について、日頃考えていること、感じていることを自由に書いてください。」(問)に対する回答を紹介していく。

1 総合的評価

最初に回答内容を「当該授業についての総合的評価」という観点で大きく分類した結果を円グラフ(図3-1)で示した。見られるとおり、全体の過半数が「よい」という肯定的評価をしているが、その一方で両価的または中間的な回答、および「問題あり」とする回答もそれぞれ2割程度あった。

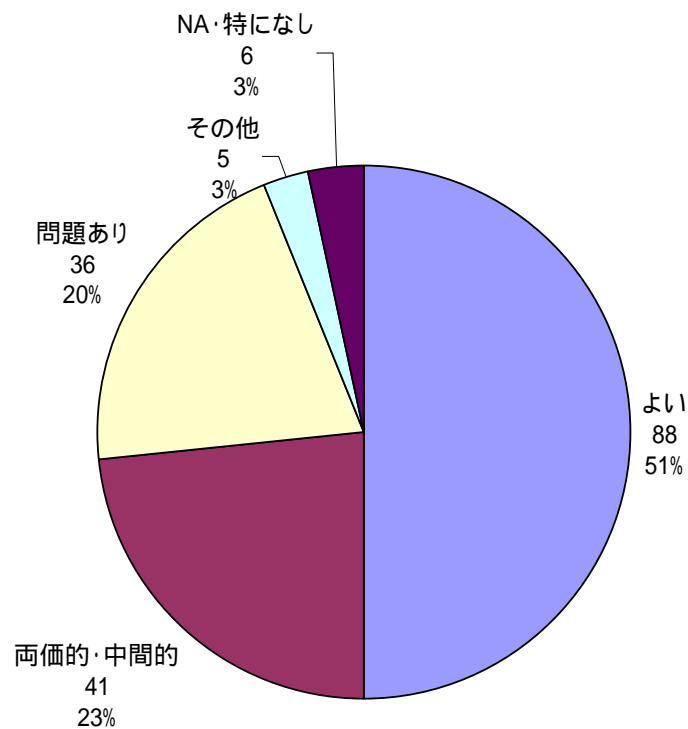


図3-1 問 の回答(当該授業についての総合的評価)

2 項目別集計

次に、回答内容を項目別に整理したものをグラフ（図3 - 2）で示そう。前章同様、一人の回答を複数の項目にカウントしていることがある。また、回答数5未満の項目は「その他」などにまとめた。

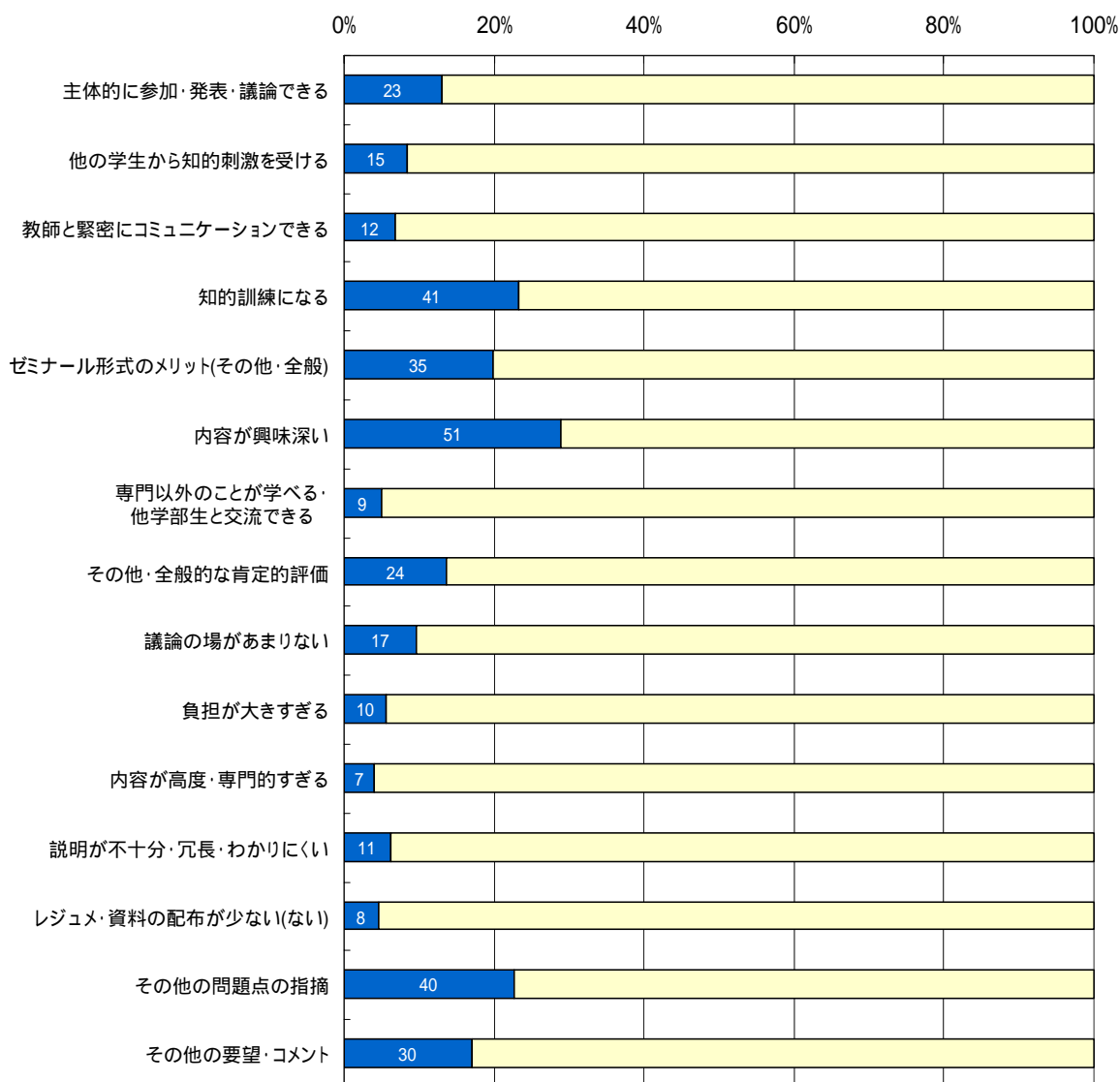


図3 - 2 問 の回答（項目別）

以下、やはり前章同様、それぞれの項目ごとの回答例を、肯定的評価（2.1）問題点の指摘（2.2）およびその他の要望・コメント（2.3）に大別して紹介していくが、回答内容は個々の授業に固有の情報が主であり、一般的な知見をそこから導き出すのは難しい。

それゆえ本章では、回答に関するコメントは最小限にとどめ、学生たちの生の言葉を（原則として原文のまま）掲載し、じっくりお読みいただくこととしたい。前章でのA群科目基礎ゼミナール全体についての回答に比べ、ここでの自分の現に履修している授業についての回答の方が、学生の言葉もよりリアリティに富み、生き生きとした記述になっているからである。なお、各回答の末尾には、回答者の整理番号に加えて、当該科目の属する系列名を参考までに付記した。

2.1 肯定的評価

(a) 主体的に参加・発表・議論できる（23件）

前章でみたA群科目基礎ゼミナール全体に対する評価と同様、個々の授業についても、やはり主体的に参加・発表・議論できるということを高く評価した回答が多かった。

自分から主体的に何かを表現していくのは、普段おっくうでなかなかしないことなので、良い機会になったと思います。（004 社会科学系科目）

基礎ゼミという形だったので、生徒が自分でテーマを決めてレジュメ等を作って発表したり、各生徒の発表に対して、自分の意見を好きなように言えるという経験ができたことが非常によかった。前期の他の基礎ゼミではほとんど講義形式で内容も少し専門的だったので、「参加する」ということができなかったが、このゼミでは自分が参加しようと思えば好きなだけ参加でき、しかも自分が興味あることについての発表もできたので、やる気を持ってがんばることができた。（007 行動科学系科目）

ゼミという授業形式は、とてもよかったと思う。自主的に勉強できるので、純粋に自分のやりたい勉強が、納得のいくまでできたし、「勉強した」という実感も通常の授業形式に比してよかったと思う。レベルが他の全学共通科目と比べて高かったのはまあしょうがないだろう。（046 行動科学系科目）

授業の内容に関しては興味を持ってとりくむことのできた数少ないものの中の1つだった。また、自分の意見を述べることができる形態もよかったと思う。……全体的には至極知的に満足できる授業だった。（060 複合系科目）

授業が学生主体であるので、発言が出やすい。話がずれたり、行き詰まった時には教官がコメントするので、授業の流れがスムーズ。話題を自由に選べるので、自分の興味に合った発表が出来るところがいいと思う。（070 行動科学系科目）

先生からの知識の伝達というよりも、議論の対象を用意してもらっているような雰囲気でした。特に同年代の人たちが、自分の生き方、価値観について、熱く語るのに耳を傾けていると、これまであまりそういう機会がなかっただけに、とても新鮮な気持ちになりました。同じ話を全く異なる視点から捉えているという事実によって改めて気付いただけでも価値のあるゼミだった。(073 複合系科目)

自分から手を挙げて発言することに何の抵抗も感じなくなったことは自分のためになった。(076 複合系科目)

他の講義と異なり、意見や質問を出しやすいし、反応も返ってくるので良いです。発表の準備は大変ですが、理解は深まります。(078 社会科学系科目)

人数が15人ぐらいでちょうどよく、話しやすい雰囲気のゼミだった。1回生も積極的に話をしている、ゼミに慣れるためには良い授業だと思う。発表についてもよく工夫されていた。(088 行動科学系科目)

少人数なので、主体的に問題に向かえる。(102 地域・文化系科目)

受動的ではなく能動的に授業に取り組もうと意識するため難しい哲学の話であっても理解できる。各個人一人ひとりが違う思想を持っているのだから、この授業のように自由に発言できるゼミは非常にうれしい。(111 複合系科目)

ゼミナールは自分から参加しなければならないとわかった。(130 地域・文化系科目)

自分で調べまとめて発表することは授業を聞くだけよりも勉強になると思います。(135 社会科学系科目)

ゼミはやっぱり講義よりも主体的に学べるような気がします。(138 行動科学系科目)

個々人が自分の勉強を自主的に進められるという点において、1回生にとってよい成長の場になっていたように思う。(143 社会科学系科目)

学生の側に考える機会を与えて下さる授業で、非常にためになりました。発言そのものももちろんですが、与えられた知識を材料にして考え、いつ指名されても意見が言えるぐらいのところまで、自分の考えをまとめる練習になったと思います。また、他の方々の意見もとても参考になりました。自主的な発言で授業が進行することも他の授業より多く、「考える授業」だなと感じました。(153 複合系科目)

(b) 他の学生から知的刺激を受ける（15件）

前記(a)とも密接に関連するが、ゼミナールに参加することによって、他の出席者たちから多くの知的刺激を受けている学生たちの姿が、以下のような記述から浮かび上がってくる。

毎回、一人ずつの報告であったが、報告の内容が個人に任されているということもあり、非常に興味深かった。報告の内容を論文にするという形態であったので、論文を書くプロセスを体験することができたと思う。自分の興味を掘り下げて、文章にするという面白さがあったが、それ以上に他の学生の発表や論文を読むことができたのが面白かった。（043 行動科学系科目）

周りのみんなのやる気に圧倒される。よい刺激である。（069 行動科学系科目）

講義形式の教官からの一方通行ではなく、自分たちと同じくらいの年代の人達から色々な意見や批評を聞いて、刺激を受けるし、考え方が広がります。（089 行動科学系科目）

他の人達と意見交換をしているうちに自分の考えやその問題点が浮きぼりになるので非常に有意義だと思う。意外な意見や視点が提示され勉強になる。楽しい。（090 行動科学系科目）

他の方々のガッチリした発表を聞いて、ああ、京大生ってすげえなぁと思うのは、この授業が一番多かったです。あと、ここまで予習に力を入れた授業もこのゼミだけでした。（091 歴史・文明系科目）

多くのトピックスの報告を聞くことができ、興味深いものでした。ただ、ほとんど議論に参加することができなかつたのが心残りではあります。活発に議論できている人は凄いなぁと思いながら授業に出ています。（103 行動科学系科目）

様々な学部・回生の人に興味に従って出席しているので、授業中に聞くことのできる学生の考えが、とても刺激になってよいと思います。（104 行動科学系科目）

それぞれの担当者が参考文献の解説にとどまらず、独自に調べ、自分の意見も述べていたので、大変興味深く聴くことができたように思います。（106 社会科学系科目）

本基礎ゼミは、院生や科目等履修生も参加していた点で他のゼミとは一味違ったおもしろさがあったと思う。学部生だけではなく、院生等との交流は自分の学生生活において非常によい刺激となっている。（129 社会科学系科目）

全学共通科目だから、1回生から4回生まで集まっているので、議論の際も自分と違った視点が聞けて面白いです。専門分野に詳しい人を見ると、自分ももっと勉強しなくては、と刺激になります。(138 行動科学系科目)

他の学生のプレゼンを聞くことで、どれくらい他の学生が理解力があるかわかるので、意欲がわくように思う。(143 社会科学系科目)

(c) 教師と緊密にコミュニケーションできる(12件)

教師の人間性に触れ、緊密なコミュニケーションができることも、ゼミナール形式固有のメリットであろう。

**先生は、1つ1つの事を丁寧に分析していく姿勢が良いと思っている。尊敬したい。
(029 社会科学系科目)

先生が直接見守って下さっている感があり、そこが普通の授業では得られにくい大切なものと思った。(102 地域・文化系科目)

先生の人柄によるところが大きいと思いますが、とてもいい雰囲気の中でゼミが行なわれており、正直なところ、自分の所属学部でのゼミより積極的に参加しようという気持ちになりました。また、内容的にも非常に興味深いものだったので楽しめました。自分はどうしてもなく気分屋でかつ習う人を選ぶ方なので、上のような条件が揃った中でゼミを受けられたことを、先生に感謝します。ありがとうございました。(105 社会科学系科目)

先生もとても気さくな方で、話しやすく良かったと思う。(108 社会科学系科目)

教授の考えも押しつけ的でない「生の意見」を聞くことができるので、面白い。(112 行動科学系科目)

最後の方の授業では、教官自身の思うところ思想が感じられ久しぶりに生の思想に触れられ、とても満足した。(152 複合系科目)

(d) 知的訓練になる(41件)

基礎ゼミナールは、当然のことながら、講義形式の授業に比べて学生に対して、より多くの知的訓練を課し知的労力を要求する。その「大変さ」を痛感しつつも、それを通しての自らの知的成長を実感している学生たちの姿が、以下のような記述からうかがえる。

当てられている日はかなり予習・準備が必要で大変だが、その分勉強になる。先生の説明、解説もふつつ知らないことが多く、洞察にも富んでいて面白い。時々「こんなことも知らんのか」という感じを露にされてこわいのだが、内容にはとても満足している。

(005 歴史・文明系科目)

さまざまなトピックをランダムにあつかっており、考えさせられることが多かった。また、いろいろな新しい知識を得ることができ、今後の課題も見つけることができた。(010 行動科学系科目)

じっくり考えることで、物を考える力がついたように感じる。(013 社会科学系科目)

少人数なので、いつ自分が指名されるかひやひやするので、身が入ってよかった。(027 地域・文化系科目)

実験を行い、その結果に対するレポートを提出することで、実験結果について自由にじっくり考えることができたため、考える力が身に付いたと思います。また、レポート提出後の授業で、解説を受けることにより、自己の考察の間違いが明確となり、より一層**についての理論に対する理解が深まりました。(037 複合系科目)

全共としては最上級にハードな部類に入る授業ですが、相当に地力をきたえられると思いました。1・2回生のころに体験しておきたかったです。(042 行動科学系科目)

「論文を書く」というテーマで楽しく受けることができました。考えるトレーニングになり、良かったです。発表形式よりも形になって残るものができるという点でよいと思います。(044 行動科学系科目)

長期間にわたって、自ら設定したテーマと向き合うことになるので、やりがいを感じやすい。また、テーマが自ら設定できるので、その後の自分の学問的関心の向かう先を見つけることもでき、基礎ゼミとしてふさわしいと思われる。(045 行動科学系科目)

他大学の学生が3回生になってからやるようなことを1回生のうちに出来たことはよかった。具体的には、「他の学生と意見をぶつけ合うこと」や「問題設定をして、そのこと

に答えていくこと」、そしてその為に「文献にあたること」などである。1 回生のうちに出来て良かったと思う理由は、上記の作業を通じて一般教養が必要だと感じたからです。

(050 行動科学系科目)

実験を毎回やるのでおもしろかった。レポートは毎回出るのできつかったが、思考力は身についたかもしれない。人数も適当だったので、実験も納得いくまでできたし、レポート提出後は、先生の説明でしっかりフィードバックできてよかった。(056 複合系科目)

おそらくこの科目を受講しなければ考えることは決してなかったであろう問題について深く考えることができた。学者たちの理論を教官が丁寧に説明してくれたので、大変わかりやすかった。(076 複合系科目)

本等で調べるというのではなく、“自分の頭で考えて”レポートを書くという経験ができたのがよかった。講義と毎回のレポートがどちらもあるという形式だったので興味を持続できたのもよかった。(083 複合系科目)

この授業を受けて、哲学書をよむにおいて、原文を読むことがいかに大切かがよくわかった。また、原文ではなく、英訳を読むことでも、和訳をよむより、はるかによく文章の構造や語の対応関係が理解できた。書物というものに対する姿勢が大きく変わったとともに、多少、論理的に思考できるようになったのではないかと思う。また、カントに対する興味がとても大きくなった。もっと深くカントに取り組んでみたいという意欲がわいた。(086 哲学・思想系科目)

基礎というわりに専門的単語がビシビシ飛び交い、一度出た単語はちゃんと覚えていること、一度言った歴史事象は覚えていて当然という空気が流れ、非常に油断のならない授業。ただ、その分得た知識が実にもなるし、ハマると面白いのでとてもクセになります。(091 歴史・文明系科目)

論文の読み方について基本的な方法が理解できました。自分一人で読んでいては見落としてしまうような問題点についても考えてみることができ、非常に役に立ちました。(114 哲学・思想系科目)

この授業は私の聞く能力と話す能力を高めるために、大変役に立ちました。自分で資料を調べて、いろいろな本を読んで知識がゆたかになりました。今まで八千字の論文を書くのは初めてです。ちょっとつらいと思います。でも、ゼミナールが大好きです。(115 行動科学系科目)

授業前にいろいろと予習しないといけないのは確かに骨が折れますが、その分得られるものも多いので、予習とかも別に苦痛には感じてません。いろいろと曖昧な部分が頭の中ですっきりしましたし、授業も割と楽しんで受けれたと思います。(136 歴史・文明系科目)

思ったよりしんどかったが、こういう授業を通してこそ、自分の見識が広がるのではないかと思う。(157 地域・文化系科目)

(e) ゼミナール形式のメリット(その他・全般)(35件)

その他、ゼミナール形式ならではの種々の、あるいは全体的なメリットをあげた回答が以下のようにみられた。

正直言って、大講義室での一步通行型授業と比較すると、様々なコストがかかるのがこの授業である。発表の回数は多いし、買わなければならないものも多いし。しかし、単位を取るためだけにこの授業を取っているのではないことを考えれば、それらのコストは妥当な投資と言うことが出来るのだろう。法学部で所属しているゼミに比べても先生のやる気は高く、自分が一体、どの学部にも所属しているのかを忘れてしまうことも多々あった。(001 社会科学系科目)

ハイキングなどの授業を越えた活動は受講生同士の交流を円滑にする意味でも楽しかった。(107 社会科学系科目)

良い授業形態だと思います。(118 複合系科目)

ゼミそのものが好きなので、授業は楽しいです。(125 社会科学系科目)

本基礎ゼミは自分がこれまでに受講した中で最も内容の充実したものであった、と言える。後期前半に行なったテキストを講読、担当者による発表は他のゼミでもよく行なうことだが、後半の**事件、判例を各担当者が調べ、報告する形式は他には見られず非常に意義があったと思う。(129 社会科学系科目)

わかりやすく教えてもらえるので、講義形式よりもいいと思う。(個人の理解度に応じた説明をうけられるので)(132 地域・文化系科目)

C群の英語と違って専門性のあるものを読めておもしろい。解説も独特のしゃべり口調で引き込まれ、聞いていて楽しい。(147 歴史・文明系科目)

(f) 内容が興味深い (51 件)

これは必ずしもゼミナール形式固有のメリットとはいえないが、前回調査での A 群科目講義に対する評価と同様、個々の授業内容の興味深さを高く評価する回答が、肯定的意見の中でも最も多数を占めた。

“ ** ” という分野に関しては、本当に様々な視点があることを知ることができたので良かった。(012 行動科学系科目)

個人的にとっても興味のある分野なのでおもしろかった。 ** は実生活にも生きてくることなので、なるほどというかんじでした。(035 複合系科目)

** をコンピュータを用いて解析するという、これまで考えもしなかったことを経験でき、非常に面白いと思う。(040 地域・文化系科目)

** の歴史に興味があったので受講した。個人的な他の教科との兼ね合いから、満足のいくほど時間はかけられなかったが、興味深く、細かな歴史的なことにも触れられたのがよかったと思う。(098 歴史・文明系科目)

私自身も、自分の学部に関わりの深いテーマを扱うことができたことに加え、その先見性の強い論理展開を 2 回生の今、知ることができたことを心から嬉しく思っています。(106 社会科学系科目)

先生の話はとてつもなく面白い。ややこしい議論をかみくだいて説明してくれるので、大変わかりやすく、基礎ゼミって素晴らしいという気分になる。(109 複合系科目)

授業内容は興味深い。ものの見方がかわる。(123 複合系科目)

授業はとても面白いが、議論が盛り上がりそうなところで時間になってしまうのが(仕方ないけど)もったいない。(137 行動科学系科目)

普段、深く考えていない ** について、その詳しいメカニズムについて全てではないけど学べて有意義であったと思う。当たり前のこととして受け入れている事柄を深く考察することの重要性にも気づいた。(140 複合系科目)

授業内容は大変おもしろく、実生活と結びついているので非常によかったと思う。(141 複合系科目)

ゼミの内容自体に興味を持って元々受講したので内容が非常に面白かった。教科書も自分の勉強したい分野で、学部の専門科目等しか出来そうもない勉強を1回生のうちからやれた感じで良かった。(163 社会科学系科目)

(g) 専門以外のことが学べる・他学部生と交流できる(9件)

自己の学部や専門以外の世界に触れられるという全学共通科目ならではのメリットの指摘は、個々の授業についての記述の中でも以下のようにみられた。

様々な学部・回生の人に興味に従って出席しているので、授業中に聞くことのできる学生の考えが、とても刺激になってよいと思います。(104 行動科学系科目)

ひたすら専門の勉強だけしていても決して知り得なかったであろう日本の現状が統計から読み取れるということをも単純に面白いと思うと同時に、これからはたとえ研究職に就くとしてもそういった世の中の数字をないがしろにはいけないと痛感しました。(106 社会科学系科目)

**学を専門にしてなくても参加できるのが嬉しいです。良い経験になりました。(137 行動科学系科目)

自分の専攻とは全く関係がないのが、かえって教養として知識が深まる。(170 地域・文科系科目)

(h) その他・全般的な肯定的評価(24件)

その他の肯定的評価としては、下記のようにさまざまなものがあり、教員がそれぞれに工夫をこらしながら授業を進めている様子をうかがうことができた。

**学的な知識を前提として要求しているわけではないので、入門者にもとつきやすい。(045 行動科学系科目)

資料はきれいでわかりやすく、実験(デモ)も楽しかった。(052 複合系科目)

TAの人が親切だった。(054 複合系科目)

特に不都合を感じることはない。進度もちょうど良いし、予習の負担も決して重くないので受講しやすい。扱っている文献も難しすぎることはなく、読みやすい。(100 地域・文化系科目)

後期は前期の理論とは違って、応用編だったので、専門もからませながら**学が学べて良かった。(138 行動科学系科目)

各回で出される問題についての解答もわかりやすい解説付きでよくわかった。(141 複合系科目)

教科書の内容を疑い、その疑問点を追求し考える上教官の姿勢からは学ぶべきことが多いと考える。(159 社会科学系科目)

授業の進み具合やスピードは適切でついていきやすい。専門性の高い内容であるが、学問全体でこのレベルまではおさえておかねばならないことを実感でき、いい。脈略のない英文をつらつら読むより、体系化された文書を読み進めてゆくことで、英語レベルも、また専門性も身につくので、有効だと思う。(167 歴史・文明系科目)

2.2 問題点の指摘

(a) 議論の場があまりない(17件)

前章でのA群科目基礎ゼミナール全体についてと同様に、個々の科目の問題点の指摘においても最も多くみられたのは、ゼミナール形式の本来のメリット、とりわけ議論の場が十分に確保・実現されていないのではないか、という意見であった。またその中で、下記 075、164、168のように、学生自身の積極性の不足を指摘する声もあった。

12月の授業の出席者が非常に少なかった。学生の発表のみでは刺激・魅力に欠けるところもあるのかもしれないとも思われたが、かと言って教官が授業を行なうだけではゼミである意味がない。各回の発表が完全に独立していたことにその原因を求めることができるかもしれない。それぞれの興味で好きに発表ができると言えば聞こえはいいのだが、そのために議論自体が浅いところに留まざるを得ないとも言えるかもしれない。この形態も良いとは思いますが、共通のテーマで進めていくのも良いのではないだろうか。(002 行動科学系科目)

ゼミナールという形態をとっているが、教官と学生の間や、学生同士での意見交換の場があまりなかった。(011 社会科学系科目)

このゼミは、人数制限をしなかったので、あまりゼミ形式にならないのが残念。(026 社会科学系科目)

ゼミと名の付くもののイメージは、かなり活発にギロン等が行われるというものだった……しかし、このゼミは一切そういうところがなく、非常に淡々とすすめられていた。(051 地域・文化系科目)

当初、言っていたディベート形式の授業が実現しなかったことは残念。もっと気楽に発言できる環境が欲しかった。(052 複合系科目)

教官が話している時間が多い時があった。基本資料をあらかじめ配布し、読んでくるよう指示し、授業では意見のやり取りに時間をさく方が良い。どんどん指名しても良いと思う。まず、2～3のグループに分け、討論させ、後に全体で討論という形の方が意見は出やすいと思った。(074 複合系科目)

学生たちの積極性があまりない。意見があまりでない。議題がとっつきにくいのでしかたないかもしれないが。(075 複合系科目)

ゼミなので、授業でもっと少人数のグループにわかれて話し合う時間があってもよいと思った。(082 複合系科目)

もっと討論する場をつくってほしいです。(097 社会科学系科目)

あまりゼミ全体としてのまとまりがなく、議論もその場その場で中途半端に終わっているのが気がかった。(101 行動科学系科目)

ゼミなので、もっと受講生がどのように考えているのか話し合いたかった。先生側からの一方通行の時間が少し多かった、もし、そのような時間配分しか取れないのであれば、皆のレポートをフィードバックしてほしい。プリントにして配るとか。(141 複合系科目)

ゼミナール形式なのに、いまいち議論の盛り上がりには欠ける気がします。自分も含め、色々至らない点(学生自身に)があるかと思いますが、議論を引っ張っていく方法(ガイドラインを作る、実例をやってみせる etc)はあるかもしれません。(164 行動科学系科目)

議論（？）に参加しない学生も多かったと思います。もっと多くの学生が自由に発言できたら、よりよい授業になったと思います。(168 社会科学系科目)

(b) 負担が大きすぎる (10 件)

2. 1(d) で紹介したように、基礎ゼミナールが学生に多くの知的訓練を課していることを肯定的にとらえる学生が多くいる一方で、下記のように負担に感じている学生も存在する。

発表の回数やレポートの字数など、もっと負担を減らしてほしいです。(009 行動科学系科目)

レポートのテーマが曖昧でしんどい。(067 地域・文化系科目)

はっきりいって、レポートを書くまでに与えられる情報が少なく、すごく難しかった。できるだけ、自分で考えるというスタンスがあったのはよかったが、漠然としか考えることができず、ほとんどのレポートが満足しないものに終わってしまった。(082 複合系科目)

授業が速くてついていけないことがたまにある。TAの人が教えてくれる時はよいけど、そうでない時は困る。レジュメがないので、できなかつたところを改めて自分でやり直すことが出来ない。課題が多くて大変だった。(139 地域・文化系科目)

(c) 内容が高度・専門的すぎる (7 件)

必ずしも多数ではないが、授業内容が高度・専門的すぎるという意見も若干みられた。

扱っている内容に意義が感じられるのがよい。だが、その内容理解に必要な知識は基礎以上のものがあるように思う。(022 地域・文化系科目)

授業内容もかなり専門的に感じた。……授業についていくのは大変だった。(119 地域・文化系科目)

(d) 説明が不十分・冗長・わかりにくい(11件)

教師の説明の仕方に不満を唱える意見も若干ながらみられた。ただ、感情的な記述は少なく、下記003にみられるように、内容の理解をより深めるための解説の充実を求める意見がいくつかあった。

“和訳の発表”に傾きがちなので、もっと本文の内容を理解し、さらに知識を深めるための説明を増やしてもらえたらもっとおもしろくなると思います。(003 地域・文化系科目)

ちょっと話が冗長になっている気もするので、もう少し、簡潔に話すよう努力して欲しい。(077 社会科学系科目)

説明の際、少々早く進む場面があり、ついていけない場合がある。(117 地域・文化系科目)

(e) レジюме・資料の配布が少ない(ない)(8件)

方法的・技術的な問題に関する意見で比較的目に付いたのは、レジюмеや資料の充実を求める意見であった。

パワーポイントで示される資料をホームページ上で参照できるようにしてほしい。(025 地域・文化系科目)

もっと関係資料などをプリントなどで配付してほしかった。(167 歴史・文明系科目)

(f) その他の問題点の指摘(40件)

その他の問題点の指摘は、他の学生の態度、シラバス、授業の進め方、成績評価の方法、教室環境、履修にかかる費用等々、下記のようにきわめて多岐にわたっている。

ふまじめな学生が若干名おり、当日、その場で和訳するため、授業の進行が遅々としてはかどらず、私などの熱心な学生は迷惑である。については二点の改善を期待したい。ひとつは、このアンケートが公表された時、それを読んだ学生自身が態度を改めること。もうひとつは、授業がもっときびしく、注意すること。(034 哲学・思想的科目)

授業の行なわれ方が一般的な「ゼミナール」のイメージとは異なっていたので、そのことに関して、シラバスに説明があった方がよかったのではないかと思う。(041 複合系科目)

進み方がもう少しはやくても良いのではないかと思う。輪読の担当者によって進度が著しく異なるが、それはゼミである以上どうしようもないことなのか。(113 哲学・思想的科目)

この教室はPCが置いてある部屋のためノートがとりにくい。(120 地域・文化系科目)

少しお金がかかりすぎる(copy代、本の代金)。授業時間がオーバーしやすい。(126 社会科学系科目)

課題が少ない。自分が発表する時間以外は割と暇になる。もっと出席を厳しくしてほしいと思う。(127 歴史・文明系科目)

.....評価の仕方についてであるが、内容が難しい分、予習できる範囲が限られており、授業では1つの文章につき1人のみが読むという形式を取っていたので、自分以外の人間が担当した場合、どんなに一所懸命に予習したとしてもそれが全く評価されないので、複数の人に担当させるなどして改善する必要があると感じた。(148 歴史・文明系科目)

当たり前のことだが、発表の演題によって興味の増減が激しい。特に問題点や論点が不明瞭だと議論のしようがないので、発表者の意図、疑問を交えた発表をしてほしい。あと、よく議論の内容が定まらなくなったりしたので混乱する前に多少の方向付けをするのも必要かもしれない。(174 行動科学系科目)

2.3 その他の要望・コメント(30件)

上記以外の要望やコメントにも、さまざまなものがあった。以下に紹介するのはその一部であるが、学生自身が積極的に参加できなかったことを率直に反省するコメント(006、018、060、103、109)がみられたのも、基礎ゼミナールに対する学生の評価や期待の高さを反映しているものといえよう。

積極的発言ができず残念。(006 歴史・文明系科目)

.....discussion を重ねるうちに行きつくところは全て一緒？なのではないかという疑問が生じてきた。難しい問題である。(012 行動科学系科目)

本の内容が難しく、自分で読んだだけでは表面上の意味しかとれなかった。先生の説明をきいて、はじめて理解することができた。そのため発言もできず、ゼミなのに申し訳ない思いた。(018 地域・文化系科目)

最初に何か自由に交流できる機会(飲み会?)があれば発言等もしやすいのでは。(031 行動科学系科目)

間合いやタイミングで意見が言えないことがあったのが少しくやしかった。(060 哲学・思想系科目)

発表の内容に制限がないため、それぞれの発表者が自由に自分の興味と教育を結びつけることには、いい面と悪い面があると思う。自分があまり関心を持っていなかった分野に触れられることは有益である。しかし、あまりゼミ全体としてのまとまりがなく、議論もその場その場で中途半端に終わっているのが気にかかった。もう少し発表対象を制限した方がゼミ参加者の個性が目立っておもしろく、回を重ねるたびに議論が発展できたと思う。(101 行動科学系科目)

ほとんど議論に参加することができなかつたのが心残りではあります。(103 行動科学系科目)

ディスカッションがあまり盛り上がらないなとも思う。これは現代っ子の悪いクセであって基礎ゼミのせいではないだろう。(109 複合系科目)

後半の“生き方”に関する部分では、僕自身の日常性から離れた抽象論が多かったように思います。当の哲学者達(.....)が彼らの哲学を非常に切実なものとして考えていたということは、すごく伝わりましたが、しかし、それと僕自身の問題や感覚との距離を強く感じました。(110 複合系科目)

3 まとめ

以上、個々のA群科目基礎ゼミナールについての回答内容の検討から得られたことを、次のようにまとめておきたい。

全体として、個々の授業に対する学生の評価は高い。学生たちの具体的な記述内容からは、学生たち自身の主体的参加と知的向上への強い意欲が感じられ、またそれに応えようとする個々の教員のさまざまな工夫と努力の様子がうかがわれる。こうした両者のベクトルが合わさることによって、基礎ゼミナールは教員と学生との知的・学問的なコミュニケーションの場として構築され機能するといえよう。

その一方で、A群科目基礎ゼミナールの現実の状況に対しては批判的な意見ももちろん存在する。しかしその大半は、議論の場の不足への批判を初めとして、基礎ゼミナールへの期待の高さや学生自身の学習意欲の高さのゆえに出てくる建設的な批判として解釈できるものであった。

以上の結果は、第2章の「まとめ」で述べた、A群科目基礎ゼミナールの全体についての回答内容とも基本的に一致している。回答内容が以上のような傾向を示したのは、(前回調査と同様に)この調査への回答を寄せたのが、とりわけ熱心で意欲的な学生たちであったからだとも考えられる。しかし、そうだとすればなおさら、これらの意見は、学生の視点からみたA群科目基礎ゼミナールのあるべき姿を示唆しており、今後の一層の授業改善のための貴重な資料となっているといわなければならない。

おわりに

第2章、第3章をとおして検討してきた本調査の結論は、次の二つの命題に簡潔に要約することができます。

学生は基礎ゼミナールのメリット（主体的参加や知的訓練）を高く評価し、また期待している。

期待の大きさのゆえに、それが十分実現されない場合には不満を抱く。

以上で、2003（平成15）年12月から翌年1月にかけて実施された、《A群科目基礎ゼミナール「学生による授業評価」》についての報告を終えたい。

「はじめに」の注で触れた『教養教育に関する人間・環境学研究科・文系群会の考え』でも表明されているように、基礎ゼミナール系科目は、講義系科目とは異なった教育の質を提供できるがゆえに、教養教育にとって不可欠の一環をなすものである。いいかえれば、講義と基礎ゼミナールはA群科目教養教育の両輪であり、今回の調査はA群講義系科目についての前回調査と合わせて、この両輪の現状と進むべき方向性とを検討するための資料となるべきものである。

最後になったが、調査にご協力いただいた先生方、そして熱意ある回答を寄せてくれた学生諸君にこの場をお借りして深く感謝申し上げたい。

2005年2月

人間・環境学研究科全学共通教育実施委員会・文系群会WG

川島昭夫

小山静子

須田千里

大黒弘慈

高橋由典

富田恭彦

吉田 純

2003 年 12 月

A 群科目基礎ゼミナールに関する「学生による授業評価」協力をお願い

人間・環境学研究科全学共通教育実施委員会・文系群会

私たち人間・環境学研究科全学共通教育実施委員会・文系群会（人間・環境学研究科の A 群科目担当者の集まり）は、今年の 6 月から 7 月にかけて、前期開講の A 群科目（A・B 群科目も含む。以下同）の中から基礎論系講義科目を中心に 20 の授業科目を選び、「学生による授業評価」を実施しました。この「学生による授業評価」については、本年度中に報告書が出され、結果が公表される予定です。

今回は講義科目を中心に「評価」が行われたわけですが、今回は同じく人間・環境学研究科が提供している A 群科目で基礎ゼミナール形式のもの（実習、講読などを含む）を選び（後期開講の全 31 科目）、それらを対象にして「学生による授業評価」を実施しようと企画しました。A 群科目のより一層の充実のため、ぜひ回答にご協力ください。

回答してもらう内容は二つあります。では、現在受講しているこの授業について、日頃考え、感じていることを自由に書いてもらおうと思います。（裏面）では、この授業に限らず基礎ゼミナール（実習、講読などを含む）という授業形態一般についての感想、意見を記してもらいたいと思います。

回答は教官退室後 15 分から 20 分くらいかけて行ってもらいます。回収は学生諸君にお願いしたいと思います。回収された調査票を封筒に入れ、封をしたうえで、その封筒を共通教育教務掛（共通教育棟 1 階）に責任をもって届けてください。

いうまでもないことですが、回答内容によって諸君たちに不利益が生ずる可能性は一切ありません。また今回の「学生による授業評価」は授業内容の改善のためだけに行われるものであり、回答結果が他の目的のために使用される可能性も一切ありません。回答していただいた結果は、後日何らかのかたちで公表したいと考えています。よろしくお願いいたします。

平成 15 年度後期 A 群科目基礎ゼミナール「学生による授業評価」

人間・環境学研究科全学共通教育実施委員会・文系群会

授業科目名 _____ 曜・限 _____

授業担当教官 _____

あなたの学部と回生を記入してください。 _____ 学部 _____ 回生

現在受講している上の授業について、日頃考えていること、感じていることを自由に書いてください。

(裏につづきます)

A群科目基礎ゼミナール（実習、講読なども含む）の授業全体について、考えていること、感じていることを自由に書いてください。なお他の基礎ゼミナール科目ですでにこの欄の回答をした人は、「すでに回答済み」とだけ記入して下さい。

ありがとうございました。



平成 15 年度後期
A 群科目基礎ゼミナール「学生による授業評価」
報 告 書

平成 17 年 3 月発行

編集 人間・環境学研究科全学共通教育実施委員会・文系群会WG

発行 京都大学共通教育推進部

〒606-8501

京都市左京区吉田二本松町

Tel 075-753-6690
